
黒羊の戦鬼

黒田手稲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒羊の戦鬼

【Nコード】

N7317Y

【作者名】

黒田手稲

【あらすじ】

戦国の世には、鬼がいた。日の本では、鬼や魔王が天下を求めて相争っていた。ジロフトの地では、帝位継承をめぐって、戦火が広がっていた。死に場所を失った若武者戸次統常が世を跨ぐとき、新たな英雄譚がはじまる。

プロローグ(前書き)

更新するかどうかは未定です。

プロローグ

戦国の世には、鬼がいた。

ある者は名を求めて、ある者は欲のために、ある者は忠孝ゆえに、そしてある者は、生き延びてしまったがゆえに、鬼と成った。

彼らのうちの幾人かは、鬼として、後世に名を残した。

鬼柴田、鬼島津、鬼若子、鬼武蔵、鬼義重、鬼美濃、鬼小島、そして鬼道雪。

歴史に明るくない者であっても、これらの名前が即座に思い浮かぶ。

中でも、鬼道雪こと雷神・立花道雪、あるいは戸次鑑連は、九州きつての知勇兼備の名将として名高い。

この道雪、男子に恵まれず、娘の？千代に立花の家督を継がせたことは、よく知られている。

その一方で、道雪は、甥にあたる戸次鎮連を養子に迎えて、戸次家の家督を継がせた。

しかし、1585年に道雪が身罷ると、戸次家を暗雲が覆う。

当時、島津の猛攻を前に主家である大友氏は敗北を重ねていた。そうした中で、戸次家当主の鎮連に、島津との内通疑惑が浮上した。

果たして、内通が真実であったかどうかは、今日に至るまで判然としない。『鶴賀城戦史』によれば、鎮連は、大友義鎮が自分を重用しないことを妬んで、島津と内通した、という。しかし、『鶴賀城

戦史』は大正時代に編修された本であり、一次史料ではない。一説には、鎮連は、主君義統に諫言を繰り返したために疎まれた、とも言われている。

いずれにせよ、大友の重臣でありながら、島津に内通していたという不名誉は、戸次家の者たちを最後まで苦しめた。

鎮連の後に名門戸次家の当主となったのは、子の統常むねつねであった。若干22歳の好青年であった。

この統常は、鎮連が内通疑惑により切腹を申し付けられた、と知らされると、大いに慨嘆した。主君大友義統が、実父に死を賜ったからではない。父が内通などという祖先に顔向けできないような不義を犯したからである。

「大人は不義だ。だが、某は島津勢と闘死しよう。そうすれば、戸次の祖先を汚辱することもないだろう」

今日伝えられているところでは、統常は、こう語った、とされる。

1586年（天正14年）12月某日夜半、豊後国鎧ヶ岳城。

統常は、島津勢に包囲されている鶴賀城に出陣するために準備をしながら、物思いにふけっていた。

幼い長子は、立花城の統虎殿に預けた。妻女も、吉弘殿にお願いした。弟たちのことも、母上にお任せしておけば問題あるまい。

鶴賀城救援のために出陣すると告げたときの、強張った妻の顔が思

い起こされる。

その一言で、全てを察したのであるう。彼女は、蒼白になりながらも、静かに「御武運をお祈りしております」と返してきた。

長子の成長を見届けられないのは、残念であるが、この妻ならば、さぞや立派な武士に育て上げることだろう。ましてや、あの統虎殿に後事を託したのだ。問題はあるまい。

一族郎党100余名、明日には全員揃う予定である。そうならば、出立あるのみ。

父が本当に島津方と内通していたかどうかは、最後まではっきりしなかった。しかし、内通疑惑が出たこと自体、すでに言語道断だ、と統常は思う。

最期の戦を前に、来し方行く末について、とりとめもなく、考えていると、衣ずれの音が聞こえた。

「統常、ここにおりましたか」

落ち着いた女の声が聞こえてきた。

「はい。いかがなさいましたか、母上」

「少し話があります。ついて参りなさい」

そう言うや、廊下を引き返そうとする母を見て、統常も立ち上がって母に続いた。

こんな夜も遅い時刻に、母上はいかなる要件があるのだろうか、と統常は思う。

母である志賀夫人は、統常の弟たちが眠る寢所に来ると、統常に、

はいってくるよう促した。

「母上、幼い弟らが熟睡しておりますところで、わざわざ話をせすとも良いではありませんか」

統常は、母にそう問いかけた。

母の話の内容が何かはわからないが、事ここにいたっては、敢えて幼い弟たちの寝ている前で話すようなことではあるまい、と思ったのだ。

それに対する母の反応は素っ気無いものであった。

「中にはいりなさい、統常」

統常が、しびしび薄暗い室内にはいると、志賀夫人が切り出した。

「統常。そなたの父である鎮連は、あるうことが、主家である大友氏を裏切って、島津方に内通していたとして切腹を命じられました」

やはり、その話か、と統常は思う。家臣や一族の者たちとは、幾度となく、この不名誉な事件について語りあってきたが、考えてみると、母上とは真剣に話し合ったことはなかった。思いつめたような母上の雰囲気伝わってきて、話辛かったというのもある。だが、やはり、戸次家の汚名を雪ぐのは男どもの役目、と考えていたことが大きかったのだろう。

「はい。我ら戸次の者は、郎党も含めて、この汚名を返上すべく、次なる戦においては不退転の決意で奮闘する所存にございます」
統常は、そう答える。既に、一族を集めての合議の場において決まったことである。

「当然のことです、統常。たとえ、裏切りによって仮初の平穩を盗み得たとしても、戸次家が不義の家だなどと汚名を残したとあって

は、あまりにも無念です。そなたも、鶴賀城に出陣して、我らが友勢を支援して、島津勢を退けなさい。決して、戸次の祖先を辱しめるようなことはしてはなりません」

燈火の揺れて定まらぬ光が、志賀夫人の顔を照らす。暗くて、母の表情までは窺い知ることができない。

室内に聞こえるのは、幼い弟たちの健やかな寝息だけ。

「勿論、其の心算でございます。母上に置かれましては、安んじて我らの槍働きについての一報をお待ちください。弟たちが、誇りに思えるような戦いぶりを島津方に見せ付けてくる所存にございます」
例え、自分がいなくとも、弟たちが我が子を補佐してくれば、戸次家が再び興隆することも夢ではない、と統常は思う。

だが、志賀夫人は、統常の言葉に賛同の意を示さず、沈黙をもって応えた。

沈黙の帳が、薄暗い室内を覆う。
弟たちのいずれかが、寝返りをうつ音か、やけにはつきりと響き渡る。

彼らを起こすまいと声を低くして、話していたつもりだったが、少し彼らの眠りを妨げてしまったのだろうか、とも思う。

だが、どうやら、単に寝返りをうっただけのようだ。
再び、寝息の二重奏が聞こえてくる。

普段ならば、どうということはないはずの沈黙が、やけに不気味に感じられる。

既に、この身は死ぬ定めにあるというのに、何故こつも怖れを感じるのだろうか。

長い、長い沈黙の後、志賀夫人は静かに言葉を続けた。
「私も決意いたしました」

決意。

父が内通のかどで切腹してより、統常自身が何度となく使い、また一族の合議の場で耳にしてきた言葉。だが、男どもが使う場合と違って、何とおどろおどろしい響きがあるのだろう。

「そなたに内顧の憂いがないようにいたしましょう」

志賀夫人は、何でもないかのように、あっさりと、そう告げた。そう、あまりにもあっさりと。

内顧の憂い。

常在戦場を信条とする武家の嫡男からすれば、その意味するところは明らか。

いや、明らかはずであった。

しかし、統常は、内顧の憂いがなくなる、ということの意味を、統常は一瞬、捉え損ねた。

その一瞬の空白を衝いて、志賀夫人は、懐より短刀を取り出した。まさか、母上は自害遊ばそうというのか。

統常が、そう考えて、母を止めようとする暇もあらばこそ。

志賀夫人は、安らかに眠っている幼子の喉元を、短刀で突き刺した。

吹き出した、熱い血潮が、統常の顔にも飛び散る。

「は、母上、一体何を……」

絶句したきり、言葉が出ない。

「そなたに申し伝えたとおりです、統常。そなたが戦場にて安んじて戦えるよう、内顧の憂いを断っておきます、と」

志賀夫人の顔は、自らの子の血で赤黒く染まっていた。

若い頃から、美しいと評判であった母の顔からは、朱塗りの能面のごとく、一切の表情が抜け落ちていた。

能面とは、表情が抜け落ちた面でありながら、常に鬼を連想させずにはおれないもの。

いや、家のため、名のため、愛しい我が子を殺める決意をしたとき、母は夜叉になるのかもしれない。

続けざまに、能の舞のごとく、ゆっくりとした所作で、志賀夫人は、二人目の乳飲み子に、その短刀の刃を突きたてた。

頸動脈より噴き出た血が、天井にまで飛び散る。

断末魔の声すら上げることなく、痙攣する我が子を見ながら、志賀夫人は、統常に申し渡した。

「これで、そなたは、思い残すことなく戦地に赴くことができるでしょう。残すは、この母のみですが、察するには及びません。もう、夜も遅い。そなたも、下がって戦に備えなさい」

言葉とは、即ち強制力。

何故、と問うことすらできずに、呆然自失としたまま、母の言葉に従って、統常は、退出した。

恐らく、母上は、あの短刀で自害されるのだろう、と統常は、ほと

んど働かぬ頭で悟る。

今までは、心のどこかで、自分や一族の男どもが華々しく散れば、それでいいのだと考えていた。

そうした息子を、当主としてあまりにも甘い、と母は考えたのである。

大友氏全体が、滅亡の危機に瀕している中で、心のどこかで帰るべき場所を確保しようとしている統常の退路を、断とうとしたのだらう。

弟たちの血を拭うこともせず、一晩物思いに沈んだまま、夜を明かした統常のもとに、さしもの統常とても予想していなかった報が飛び込んできた。

曰く、志賀夫人が島津勢の宿営地に討ち入り、明かりを消し、島津兵十数人を殺し、城に火を放ってその場で自害した、と。

戸次の男どもに任せるだけでは足りないとして、女だてらに、一族の汚名を雪がんとして、自ら島津勢相手に見事に立ち回った、烈女の最期であった。

彼岸よりご覧遊ばす母上を前に、無様な振る舞いは決してできない。いや、してはならない。

自分が不甲斐ないばかりに、母に率先してこのような行動をとらせたい、という思いがあるだけに、一層、統常はそう思う。

「誰かある!」

声をあげて、家中の者を呼ぶ。

「ここに」

まだ若い城詰めの郎党が即座に応じる。

「参集している一族のものを、集めよ。あわせて、一切の家宝、財宝を持って来させよ」

統常は声を大にして、そう命じた。

「ハッ」

威勢のよい返答が聞こえた。

「母上、御照覧あれ。某は立派に勤めを果たして参ります」

そう呟くと、統常もまた、具足を身に纏い、出陣の準備を整えた。

一族郎党の眼前にて、一切の家宝を焼き尽くした統常は、鶴賀城救援のために、鎧ヶ岳城を引き払った。

総勢百余名、生きて還る心積もりの者は、もはや一人たりとていなかった。

鶴賀城救援に赴いたのは、大友氏の救援要請に応じた豊臣勢であった。指揮をとった軍監の仙石秀久は、一軍を率いるに足る将才は持ち合わせておらず、島津勢の釣り野伏せに、モノの見事に釣り上げられた。

挙句の果てには、味方を見捨てて讃岐にまで逃走という醜態を晒した。

しかし、豊臣勢の道案内を勤めた、統常率いる戸次勢百余名は、そうした醜態とは無縁であった。

島津方に誘引されて劣勢にあった豊臣勢の中にあつて、奮闘し、圧倒的に優勢な島津勢とぶつかること四十五回。

ことごとく、島津勢に勝利し、雲霞の如く群がる島津兵を次々に薙ぎ払った。

「鎮時どの、調子はどうだ」

統常は、一族の鎮時を見つけて、声をかける。

「おお、すでに30以上の首級を上げたわ。あの軍監のまずい指揮のおかげで、かような活躍の場を与えてもらえるとはな。これ以上の華はあるまいて」

陽気な声で、鎮時が応じる。

すでに、多くの交戦を経て、相当疲労も溜まっているはずであるが、そんな様子は微塵も見せていない。

「右前方より、新納大膳正殿の本隊」

そう注進するものがある。

「ほう、大膳正殿本人がおられるか。これは、またとない冥土の土産となりそうだの」

鎮時が、笑いながら、声を上げる。

「よし。総員、呐喊！目指すは、新納殿が首のみ。皆の者、続け！」

統常は、大音声にそう叫ぶや、新納忠元の首をかき切らんとして、突撃した。

あと一歩で、接敵というまさにその瞬間、轟音が辺りを覆った。

種子島か、と思う間もなく、視界が暗転する。

昂ぶった精神のためか、はたまた既に傷だらけであったためか、不思議と痛みは感じなかった。

自分を飛び越えて突き進む騎馬の嘶きが聞こえる。

統常様、と叫ぶ声が聞こえるような気がする。

だが、起き上がるうとしても、もはや体が言うことを利かない。

ここまでか、と思う。

他の者は、新納大膳正に迫ることができたのだろうか。

島津の重臣である彼の者を討ち果たすことができれば、我ら一族にとっての望外の喜び。

今際に思うのは、果たして、自分は母に顔向けできるような死に様であったのだろうか、という思い。

暗転する意識のなか、静かに頷く母の姿を、統常は幻視した気がした。

戸次系譜は語る。

「統常先陣を鶴ヶ城下に承はり、一日四五度之戦、毎度薩州勢を追ひ、敵数輩を討ち取り、其後戦死す（統常の同族家中、僕従百余人同時に戦死す）、実に天正十四丙戌の年、十二月十二日未の刻也」
（原文は漢文）

また、鶴賀城戦史は次のように戸次家を称える。

「母一夕深更人静まるの時、子息統常に言て曰く父君正義の諫めを容れず事遂に此に及ぶ、今は将た何をか言はん、仮令仮初の安逸を偷むも、不義の汚名を松代に残さんこと、口惜き限りならずや、御身請ふ願くば鶴賀城に出陣し、我が軍を援けて敵を退け、戸次の祖先を辱かしむる事勿れ。妾が意既に決す、御身をしてまた内顧の憂無からしめんと、語りて懐剣を抜き、側に熟睡したる二人の愛児を刺殺し、直ちに出でて薩兵等の宿営に入り、燈火を滅して敵兵十数人を殺傷し城に火を掛け自刃して其場に斃る、是れ十二月朔日の夜半なり、管内不意の騒動に打驚き、刀を揮いて闇中に同志打ちし、為めに死傷する者亦た鮮しとせず、此に於て統常の勇氣百倍を加へ、鎧ヶ嶽を会つて鶴賀城に利光勢を援け、薩軍と奮闘して戦死す、伝へて、今尚お母子の忠勇義烈を称揚するもの鮮ならず」。〔鶴賀城戦史〕旧字体は適宜常用漢字に改めてあります）

この物語は、戸次統常の戦死をもってはじまる。

第二話

得体の知れぬ叫び声が、耳に響いた。

飛び起きた統常が見たのは、大声を上げながら自分に向かってくる、大柄なヒト型の生物であった。まだ20mほどは離れているだろうか、かなり距離があるにもかかわらず、その異様な風体は目に付いた。

身長は2mほどはあろうか。見たこともない鎧に身を包んでいる。だが、兜はかぶっておらず、ざんばら髪から突き出ている30cmほどの角が、遠くからでもはっきりと分かる。

そのモノが近づいてくるにつれ、それがヒトなどではないことは、ますます明らかとなった。

まず、眼が赤く輝いている。肌の色は褐色で、髪は黒い。

だが、何よりも異様なのは、やはり額より突き出ている一本の角であった。

あれが、鬼なのだろうか、と統常は思う。

大体、ここはどこなのだろうか。鬼が存在するのだから、現世ではなく、地獄かもしれない。

あの最期の瞬間、種子島で胸を撃たれたのは、はっきりと覚えている。

現に、具足をみゃれば、胸の部分に小さな穴が開いている。

なのに、自分はこうして生きているし、どこにも痛みを感じないのだ。

まだ覚醒しきらない頭で、そんなことを考えていた統常であったが、

間近に迫った鬼が、自分に向かって鉈を振り上げるに及んで、飛び跳ねるように起き上がって、力の限り距離をとった。手には、愛用していた5尺（150cm）の大太刀がある。

鬼は、鉈を力まかせに振り回して突進してきた。

およそ、剣術のイロハすらも感じさせない、強引な太刀筋であった。ただ、鬼の巨軀から繰り出されるだけあって、一撃でももらえば、こちらが吹き飛びそうである。

統常は、鬼の鉈を軽くないしながら、隙を見計らっていた。

足を巧みに動かして、鬼の攻撃をスルリとかわす統常に苛立ったのか、鬼は大きく振り被って、強引に統常に斬りかかるうとした。

大きく振り被るといふのは、相手に大きな隙を作るといふこと。

日ごろより、鍛錬を欠かすことのなかった統常が、その隙を見逃すはずはなかった。

電光石火の踏み込みから、鬼の胸に太刀を突き立てる。

皮製と思われる粗末な鎧を貫き、太刀を一気に押し込む。

仕留めた。

そう確信した統常であったが、鬼がなおも強引に斬り付けようとするのを察知して、太刀を鬼に突き刺したまま、飛び退いた。

鬼というだけあって、急所の位置もヒトとは異なるのか、はたまた単純に生命力が強いだけなのか。奇声を上げながら、統常に突進してくる鬼を、統常はたくみな歩法でかわした。

周囲は、灌木がまばらに点在する草原であり、盾にできるような障害物も存在しない。

太刀が鬼の胸に突き刺さっている以上、手持ちの武器は脇差一本し

かない。
胸を刺しても生きている鬼を、果たして脇差一本で倒せるのか。
既に死んでいるはずの身でありながら、やけに自らの心臓の鼓動を
感じる。

おそらく、このままかわし続けていれば、いくら鬼といえども、失
血死するだろうが、それまでこちらの身が持つという保証もない。

鬼といえども、姿形はヒトに似ている以上、首は急所なはず。

統常は、間合いを計りながら、そう推測する。

鬼が苛立ちを滲ませながら、何度目かの大振りをしてきたのにあわ
せて、統常は、鬼の胸元に飛び込み、脇差で鬼の首を強引に突いた。
鬼の突進をたくみに利用したカウンターになったため、脇差は、頸骨
を突き砕いて、鬼の後頭部を突き破った。

統常は、鬼がなおも反撃してくることを警戒して、脇差を手放した
まま、一気に飛び退いて距離をとった。

得体の知れない生き物を相手どったために、統常にも余裕はまった
くなく、息も切れ切れであった。

鬼は、なおも脇差を引き抜こうとしたようであったが、もはや立っ
ていることも適わなかったたのである。

前のめりになったかと思うと、そのまま、どつとどつとぶせに倒れ
た。

鬼が、短く痙攣したのち、完全に動かなくなったのを見計らって、
統常は息を整えながら、その場に倒れこんだ。

自分が仕留めた鬼を見ながら、統常は、自分が生き延びてしまった

のではないのか、との懸念を強くした。
死後の世界にいるにしては、自分の体は、あまりにも強く生を感じさせるのだ。

風が温かいことから、ここが冬の戸次川ではないことは確かだ。

だが、もし自分が生きたまま、神隠しに遭ってこの場に連れ込まれた場合、戦場からは自分の遺体が発見されないだろう。

戸次家の手勢の者すべての死が確認されているのに、当主の遺体だけ見つからない、となったら、どうなってしまうのか。

鬼という目前の脅威がなくなったことで、自分が生き延びてしまったのではないか、という恐怖が統常を襲う。

父が戸次家にもたらした汚辱を雪ぐためにも、統常が自ら島津勢に斬り込んで、討死することが、絶対に必要であった。

まして、母が、自らの手で幼い我が子二人を殺め、その後、島津勢の宿営地に斬り込んで、果てたのである。

自分だけ、おめおめと生き延びたのではないか、という疑念は、統常にとって、あまりにも恐ろしいものであった。

恐ろしい疑念で頭が一杯になる前に、統常は、無理矢理に考えることをやめた。

鬼が生きてヒトに襲いかかってくる世が、現世であろうはずはない。修羅道に堕ちた武者が向かうという冥土のどこかなのだろう。

統常は、敢えて目前の脅威であった鬼の検分に意識を集中した。

立ち上がって、うつ伏せに倒れている鬼をひっくり返し、胸部に刺さったままの大太刀を引き抜こうとした。

2m近い巨躯であることから、さぞや力が要ることだろうと思った

が、簡単に鬼の死体を横向きに押し倒して、太刀を引き抜くことができた。

鎧のように堅い筋肉が隆々としているのに、存外軽いものだ、と統常は感じた。

統常は、太刀を引き抜いた後に、鬼の死体を仰向けにひっくり返し、死体の検分を行う。

若いとはいえ、既に島津相手に何度も戦場に立った身だ。首実検などは慣れたものだ。

鎧は、やはり粗末な皮をなめしたものにすぎなかった。これでは、ほとんど防具の役目を果たさないだろう。

だが、鎧など不要なかもしれない。なにしろ、鬼の筋肉自体が恐ろしく硬い。これだけで、下手な矢など弾いてしまうのではないかと、と思わせるものがある。

容貌は魁偉としか表現しようがない。ヒトならば、充血した白目を剥くと表現すべきところだが、どうやら白目などはなく、黒目しかないようだ。生前は、赤く光っていたが、今やその眼光も消失している。

そして、何よりも特筆すべきは、鬼の鬼たる証。すなわち、額から突き出ている30cmはあるつかという大きな一本の角である。これだけで、このモノが鬼だと誰しもが判別できるだろう。

鬼が持っていた鉞は、いかにも粗悪品であって、刃すら潰れて存在しない。斬るといふより叩き潰すための道具に見えた。血や脂がこびりついて、所々錆び付いていることから、この鬼はそれなりに獲物を屠ってきたのであろう。

死体を調べてわかるのは、それぐらいであった。

ここがどこか、手がかりになりそうなものは、一切なかった。

周囲は、腰の高さまで草が生茂った草原で、灌木がまばらに見える程度にすぎない。

草が花を咲かせていることから、季節は春から初夏といったところか。顔を撫でる風も、暖かく、春の息吹を伝えてくる。

鬼相手に立ち回ったからであろうか、統常は、急に喉の渴きを覚えた。

川でも近くにあればよいが……。

兎に角、体を動かすか、目前のことを考えていないと、思考はすぐに戸次川に向かいそうになる。

ここは、修羅たちが墮ちる冥土なのだ、と強引に考えを打ち切って、統常は、水場を確保するために、草原を歩きはじめた。

このとき、統常は、自分が死ねなかったかもしれない、という推測に恐れをなしていたのだ、と思っていた。

それは、一面では、決して間違っではないなかった。

だが、統常は、母とは違い、妻子を安全な後方に預けたまま、出陣したのであった。

自分の死を契機として、戸次家が再興することを、期待してのことであった。

子のため、家のために死ぬというのは、武家としてあるべき姿。

しかし、その死に場所を失ったとき、生きていれば妻子に再会できるかもしれないという思いが、全く芽生えなかったと言えるだろうか。

統常自身、決して認めようとしなかったし、また、意識もしていなかったが、心の何処かで、死線を乗り越えた後に、生への執着が生

まれつつあった。

そうした無意識の情念を、心の何処かで感じ取っていたのである。統常は、深く内省することを恐れ、前のめりに行動しようとしていた。

第三話

結局、夕闇が迫っても、統常は、水場を見つけることはできなかった。

草の丈は短くなり、膝下に葉先があたりかどうかといったところである。

歩きやすくなつたが、逆に、統常は新たな敵に悩まされることになつた。

すなわち、先ほどの鬼よりも大きな巨鳥である。

遙か上空より急降下して、統常を仕留めんとした巨鳥の最初の一撃をかわすことができたのは、僥倖以外の何ものでもなかつた。

周囲を警戒しながら歩んでいた統常であつたが、まさか空から化物が襲いかかってくるとは、想像だにしておらず、全くの無防備であつたのである。

虫の報せとでも言うべきか、漠然とした殺気を感じて、上空を見上げた統常の眼前に、統常自身よりもはるかに巨大な鳥が飛び込んできた。

咄嗟に、受身の要領で自ら地に伏せることで、初撃をかわした。

しかし、鳥は上空を遊弋しながら、統常を仕留める機会をうかがっている。

周囲には灌木すらも見当たらないとあつては、身を隠すこともできない。

鬼相手と違つて、自分の間合いをとることすらできないために、鳥の化物は、統常にとって難敵であつた。

痺れを切らせて襲い掛かってくる鳥に、逆に切りつけようとするが、どうにも距離感がつかめず、太刀を浴びせることができない。鳥の狙い自体は見え見えであるから、回避することはできるが、反撃できなくてはジリ貧である。

弓か種子鳥でもあれば、鳥の化物ごときに遅れをとることはない、と思うが、そんなものは当然持ち合わせてはいない。

だが、数度に及ぶ交戦の後、チャンスが到来した。

何度襲い掛かって、巧みに回避しつづける統常に業を煮やしたのか、巨鳥は、こちらの死角を衝こうともせずに、地表すれすれまで突進してきた。

正面上空から突っ込んできた鳥の爪が、統常を捕らえようかという瞬間、統常は、大太刀で鳥の胴体を突き上げた。

そして、爪で捕まえられないよう、そのまま一気に前方に飛び出した。

鳥は、バランスを崩して、地面に激突する。

統常は、振り返りざま、鳥の背後から大上段に切りつけた。

なおも、翼をばたつかせながら、鳥は足掻こうとするが、飛べない鳥はもはや脅威ではなかった。

鬼同様、信じられないほどの生命力であったが、首を切り落とすと動かなくなつた。

夕暮れまでに、統常は、3回も、この鳥に襲われることとなった。どうやら、この鳥の化物は、草原一帯を餌場としているようであった。

そして、今に至る。

狼か野犬でもいるのであろう。

辺りが薄暗くなつてより、盛んに、遠くから狼と思しき野獣の遠吠えが聞こえる。

見たこともないような巨鳥や鬼が住まう草原である。狼が尋常の大きさであるという保証は、どこにもなかった。

野宿は止むを得ないが、身を隠すことができる場所を確保したい。

統常は、切にそう思う。

つい先刻まで、どう死ぬか、と考えていた人間の行動としては、奇妙に感じられるが、分けもわからぬ世界に放り出されて、再三にわたって、化物の直接的な脅威に晒されてきたのである。ヒトとしての本来の生存本能が強くなったとしても、不思議ではない。

まして、武家の人間が、得体の知れぬ畜生ごときに殺されたとあつては、いい笑いものである。

とりあえず、遠吠えがする方向に進んでも、碌なことはあるまい。

そう考えて、進行方向を転じようとした統常の眼の片隅で、かすかな火の光が瞬いた。

遠方をよくよく見やれば、確かに灯りである。それも、松明の光に似ていた。

もちろん、鬼が住まう原野である。鬼火がいたとしても不思議ではない。

だが、野獣を追い払うためにも、火は有効だ。とりあえず、火の光を目印にして進むしかあるまい。

統常は、そう覚悟を決めて、火の光に向かって、早足で歩を進めた。

近づくにつれ、松明をかざしているのが、50人程度の一団であることが、はっきりとしてきた。

辺りが既に薄暗いことから、はっきりとは断言できないが、松明の数と雰囲気から推し測って、その程度だろう、と統常は判断したのである。

事情を聞くためには、彼らに話しかけるのが一番だが、どうしたものか。

統常は、そう思う。

こんな夕暮れ時に、街道筋とも思えない草原をうろつくなど、普通ではあるまい。

下手をすれば、野盗かもしれないし、あるいは武装した百姓どもが落ち武者狩りに来ているという可能性もある。

そんななか、見るからに大将という具足を身に纏った統常が、このこと出て行ったら、どうなるか。

遠目に、一団を監視しながら、そう考えをめぐらせていた統常であったが、考えを中断せざるをえなかった。

突然、一団が騒がしくなっただと思ったら、鋭い悲鳴が響いたのである。

いくつかの松明が、大きく揺れ動くのが見える。

まるで夜襲に遭った軍勢のよう。

同時に、狼どもの吠える声もしきりに続く。

狼が襲いかかったのか。

統常が咄嗟にそう思った。

いずれにせよ、まずは、様子を見るために、もっと近づいてみるしかあるまい。

統常は、そう考えて、慎重に、一団に接近した。

なおも、悲鳴が相次ぐ。尋常ではない。

一団の息遣いを感じられるほど近くまで接近すると、大人の男よりも大きな狼が飛び跳ねたのが、松明の明かりではっきりと見えた。

もはや、間違いない。野盗か行商の隊列か、はたまた別の一団か分からないが、狼どもが4 - 50人はいると思われる人間の集団を襲っているのである。しかも、その狼がまた、尋常ではないほどに大きい。

「バラバラに逃げては、狼の餌食になるだけだつ。火をもっと増やして、威嚇しろ」

男が、そう大声で怒鳴る声が聞こえてくる。

赤子の鳴き声が辺り構わずに響き渡り、騒々しい。

「折角、あの領主から逃げてきたつていうのに、あたしたちはこんなところで死ぬのっ」

狂ったように、泣き叫ぶ女の声が聞こえる。

領主から逃げてきた……？さては、賦役に耐えかねて逃散した農民たちの一団か？

統常は、そうアタリをつける。

農民が逃散して、流民となるのは、この戦国の世にあっては、珍し

くもなんともない。

だが、とりあえず野盗や野武士の一団ではないと分かって、統常の覚悟も決まる。

水も食糧もなく、街の方角もわからないとあっては、野垂れ死ぬしかない。

それならば、彼らを狼から救い、見返りとして水を求めるほうがよい。

流民といっても、一皮剥けば野盗と変わらない者も多いが、座して見ている、この一団を平らげた狼が自分に襲いかかってくることは、明らかである。

ならば、まずはこの流民の一団に助太刀したほうがよい。

統常がそう決断したとき、後方から鋭い気配が彼を襲った。

反射的に横に飛び退きざまに振り返ると、大狼が眼前に迫っていた。しかも、三頭ほどで、統常を半包围するように、接近してくる。

狼どもが賢いとは、話には聞いていたが……。どうやら、この狼たちの頭は、一人たりとも逃がすつもりはないようだな。

大太刀を鞘から抜き払いながら、統常はそう考えた。

狼は、三頭で統常を囲むようにしながら、じわりじわりと接近してきた。

絶対絶命、と言ってもいいはずであるが、統常はそれほど脅威を感じなかった。

三対一であっても、鳥と比べれば、恐ろしく間合いが測りやすい。

包囲されるのを待つよりは、と覚悟を決めた統常は、正面の一頭に向かって無造作に向かって接近する。

もちろん、これは釣りだ。

正面の狼が警戒しながら体勢を低くした。飛び掛るための、溜めといったところだ。

これに対して、左右の狼は、調子を合わせて襲い掛かってくる。

釣れた。

統常の首筋めがけて、狼が二頭飛び込んできた。

こつも読み通りとは。さすがは犬畜生。

統常は、一步後退して、狼の跳躍をかわしざまに、二閃。それだけで、二匹を両断した。

続けて、正面から、最後の一頭が突進してきた。だが、調子をずらされた狼の愚直な跳躍など、さしたる脅威ではない。

統常は、体を半身ほどずらしながら、逆袈裟に斬りつけた。

文字通り、瞬く間に、三匹を倒した統常であった。

統常が一団のほうを見やれば、狼にいいように翻弄されているようで、狂乱した叫び声があちこちから断続的に続いていた。狼どもが喉元に噛み付くためか、断末魔の悲鳴は聞こえてこない。

狼をやるときは、頭を倒さなければならぬが……。こう暗く
ては、どこにいるかもわからない。
手当たり次第に狼を屠っていくしかあるまい、と統常は判断した。

狼の襲撃に紛れ込んだ野盗と勘違いされてもつまらない。

統常は、そう考えるや、大音声に、「戸次統常、義により助太刀い
たす」と名乗りをあげて、流民に襲い掛からんとする狼に斬りかか
った。

続けざまに狼を切り伏せながら、流民どもを観察した。

よく見れば、体格の良い男衆が何人か、粗末な槍を力任せに振るい
ながら、狼を倒していた。

だが、いかんせん、狼のほうが多い。

腰が引けたまま、弓を構えていた男を見つけた統常は、無理矢理、
男から弓と矢筒を奪った。

「何をしゃがる」と叫ぶ男を無視して、矢を番えると、続けざまに
狼に向かって射掛けた。

薄闇のなかで矢を射掛けても、当たるものではないはずだが、統常
自身が驚くほど、面白いように矢が当たる。

突如、矢筒が空になるまで射続けていた統常の耳に、長く印象的な
遠吠えが飛び込んできた。

その遠吠えが聞こえるや、狼は一斉に退いていった。

さしずめ、犠牲が多すぎると判断した狼の頭が、退却を指示し
たのだろう。

統常は、そう判断した。

統常が、一息いれて、弓を下ろすと、統常に槍を向けてくるもの
がいた。

「おぬしは、何ものじゃ」
そう誰何する、男の声が聞こえてきた。

やはり、こうなるか。
統常は、嘆息しながら、声が出た方へ向き直った。

第四話

結局、夕闇が迫っても、統常は、水場を見つけることはできなかった。

草の丈は短くなり、膝下に葉先があたりかどうかといったところである。

歩きやすくなっただが、逆に、統常は新たな敵に悩まされることになった。

すなわち、先ほどの鬼よりも大きな巨鳥である。

遙か上空より急降下して、統常を仕留めんとした巨鳥の最初の一撃をかわすことができたのは、僥倖以外の何ものでもなかった。

周囲を警戒しながら歩んでいた統常であったが、まさか空から化物が襲いかかってくるとは、想像だにしておらず、全くの無防備であったのである。

虫の報せとでも言うべきか、漠然とした殺気を感じて、上空を見上げた統常の眼前に、統常自身よりもはるかに巨大な鳥が飛び込んできた。

咄嗟に、受身の要領で自ら地に伏せることで、初撃をかわした。

しかし、鳥は上空を遊弋しながら、統常を仕留める機会をうかがっている。

周囲には灌木すらも見当たらないとあっては、身を隠すこともできない。

鬼相手と違って、自分の間合いをとることすらできないために、鳥の化物は、統常にとって難敵であった。

痺れを切らせて襲い掛かってくる鳥に、逆に切りつけようとするが、どうにも距離感がつかめず、太刀を浴びせることができない。鳥の狙い自体は見え見えであるから、回避することはできるが、反撃できなくてはジリ貧である。

弓か種子島でもあれば、鳥の化物ごときに遅れをとることはない、と思うが、そんなものは当然持ち合わせてはいない。

だが、数度に及ぶ交戦の後、チャンスが到来した。

何度襲い掛かって、巧みに回避しつづける統常に業を煮やしたのか、巨鳥は、こちらの死角を衝こうともせずに、地表すれすれまで突進してきた。

正面上空から突っ込んできた鳥の爪が、統常を捕らえようかという瞬間、統常は、大太刀で鳥の胴体を突き上げた。

そして、爪で捕まえられないよう、そのまま一気に前方に飛び出した。

鳥は、バランスを崩して、地面に激突する。

統常は、振り返りざま、鳥の背後から大上段に切りつけた。

なおも、翼をばたつかせながら、鳥は足掻こうとするが、飛べない鳥はもはや脅威ではなかった。

鬼同様、信じられないほどの生命力であったが、首を切り落とすと動かなくなつた。

夕暮れまでに、統常は、3回も、この鳥に襲われることとなった。どうやら、この鳥の化物は、草原一帯を餌場としているようであった。

そして、今に至る。

狼か野犬でもいるのであろう。

辺りが薄暗くなつてより、盛んに、遠くから狼と思しき野獣の遠吠えが聞こえる。

見たこともないような巨鳥や鬼が住まう草原である。狼が尋常の大きさであるという保証は、どこにもなかった。

野宿は止むを得ないが、身を隠すことができる場所を確保したい。

統常は、切にそう思う。

つい先刻まで、どう死ぬか、と考えていた人間の行動としては、奇妙に感じられるが、分けもわからぬ世界に放り出されて、再三にわたって、化物の直接的な脅威に晒されてきたのである。ヒトとしての本来の生存本能が強くなったとしても、不思議ではない。

まして、武家の人間が、得体の知れぬ畜生ごときに殺されたとあつては、いい笑いものである。

とりあえず、遠吠えがする方向に進んでも、碌なことはあるまい。

そう考えて、進行方向を転じようとした統常の眼の片隅で、かすかな火の光が瞬いた。

遠方をよくよく見やれば、確かに灯りである。それも、松明の光に似ていた。

もちろん、鬼が住まう原野である。鬼火がいたとしても不思議ではない。

だが、野獣を追い払うためにも、火は有効だ。とりあえず、火の光を目印にして進むしかあるまい。

統常は、そう覚悟を決めて、火の光に向かって、早足で歩を進めた。

近づくにつれ、松明をかざしているのが、50人程度の一団であることが、はっきりとしてきた。

辺りが既に薄暗いことから、はっきりとは断言できないが、松明の数と雰囲気から推し測って、その程度だろう、と統常は判断したのである。

事情を聞くためには、彼らに話しかけるのが一番だが、どうしたものか。

統常は、そう思う。

こんな夕暮れ時に、街道筋とも思えない草原をうろつくなど、普通ではあるまい。

下手をすれば、野盗かもしれないし、あるいは武装した百姓どもが落ち武者狩りに来ているという可能性もある。

そんななか、見るからに大将という具足を身に纏った統常が、このこと出て行ったら、どうなるか。

遠目に、一団を監視しながら、そう考えをめぐらせていた統常であったが、考えを中断せざるをえなかった。

突然、一団が騒がしくなっただと思ったら、鋭い悲鳴が響いたのである。

いくつかの松明が、大きく揺れ動くのが見える。

まるで夜襲に遭った軍勢のよう。

同時に、狼どもの吠える声もしきりに続く。

狼が襲いかかったのか。

統常が咄嗟にそう思った。

いずれにせよ、まずは、様子を見るために、もっと近づいてみるしかあるまい。

統常は、そう考えて、慎重に、一団に接近した。

なおも、悲鳴が相次ぐ。尋常ではない。

一団の息遣いを感じられるほど近くまで接近すると、大人の男よりも大きな狼が飛び跳ねたのが、松明の明かりではっきりと見えた。

もはや、間違いない。野盗か行商の隊列か、はたまた別の一団か分からないが、狼どもが4 - 50人はいると思われる人間の集団を襲っているのである。しかも、その狼がまた、尋常ではないほどに大きい。

「バラバラに逃げては、狼の餌食になるだけだつ。火をもっと増やして、威嚇しろ」

男が、そう大声で怒鳴る声が聞こえてくる。

赤子の鳴き声が辺り構わずに響き渡り、騒々しい。

「折角、あの領主から逃げてきたつていうのに、あたしたちはこんなところで死ぬのっ」

狂ったように、泣き叫ぶ女の声が聞こえる。

領主から逃げてきた……？さては、賦役に耐えかねて逃散した農民たちの一団か？

統常は、そうアタリをつける。

農民が逃散して、流民となるのは、この戦国の世にあっては、珍し

くもなんともない。

だが、とりあえず野盗や野武士の一団ではないと分かって、統常の覚悟も決まる。

水も食糧もなく、街の方角もわからないとあっては、野垂れ死ぬしかない。

それならば、彼らを狼から救い、見返りとして水を求めるほうがよい。

流民といっても、一皮剥けば野盗と変わらない者も多いが、座して見ている、この一団を平らげた狼が自分に襲いかかってくることは、明らかである。

ならば、まずはこの流民の一団に助太刀したほうがよい。

統常がそう決断したとき、後方から鋭い気配が彼を襲った。

反射的に横に飛び退きざまに振り返ると、大狼が眼前に迫っていた。しかも、三頭ほどで、統常を半包围するように、接近してくる。

狼どもが賢いとは、話には聞いていたが……。どうやら、この狼たちの頭は、一人たりとも逃がすつもりはないようだ。

大太刀を鞘から抜き払いながら、統常はそう考えた。

狼は、三頭で統常を囲むようにしながら、じわりじわりと接近してきた。

絶対絶命、と言ってもいいはずであるが、統常はそれほど脅威を感じなかった。

三対一であっても、鳥と比べれば、恐ろしく間合いが測りやすい。

包囲されるのを待つよりは、と覚悟を決めた統常は、正面の一頭に向かって無造作に向かって接近する。

もちろん、これは釣りだ。

正面の狼が警戒しながら体勢を低くした。飛び掛るための、溜めといったところだ。

これに対して、左右の狼は、調子を合わせて襲い掛かってくる。

釣れた。

統常の首筋めがけて、狼が二頭飛び込んできた。

こつも読み通りとは。さすがは犬畜生。

統常は、一步後退して、狼の跳躍をかわしざまに、二閃。それだけで、二匹を両断した。

続けて、正面から、最後の一頭が突進してきた。だが、調子をずらされた狼の愚直な跳躍など、さしたる脅威ではない。

統常は、体を半身ほどずらしながら、逆袈裟に斬りつけた。

文字通り、瞬く間に、三匹を倒した統常であった。

統常が一団のほうを見やれば、狼にいいように翻弄されているように、狂乱した叫び声があちこちから断続的に続いていた。狼どもが喉元に噛み付くためか、断末魔の悲鳴は聞こえてこない。

狼をやるときは、頭を倒さなければならぬが……。こう暗く
ては、どこにいるかもわからない。
手当たり次第に狼を屠っていくしかあるまい、と統常は判断した。

狼の襲撃に紛れ込んだ野盗と勘違いされてもつまらない。

統常は、そう考えるや、大音声に、「戸次統常、義により助太刀い
たす」と名乗りをあげて、流民に襲い掛からんとする狼に斬りかか
った。

続けざまに狼を切り伏せながら、流民どもを観察した。

よく見れば、体格の良い男衆が何人か、粗末な槍を力任せに振るい
ながら、狼を倒していた。

だが、いかんせん、狼のほうが多い。

腰が引けたまま、弓を構えていた男を見つけた統常は、無理矢理、
男から弓と矢筒を奪った。

「何をしゃがる」と叫ぶ男を無視して、矢を番えると、続けざまに
狼に向かって射掛けた。

薄闇のなかで矢を射掛けても、当たるものではないはずだが、統常
自身が驚くほど、面白いように矢が当たる。

突如、矢筒が空になるまで射続けていた統常の耳に、長く印象的な
遠吠えが飛び込んできた。

その遠吠えが聞こえるや、狼は一斉に退いていった。

さしずめ、犠牲が多すぎると判断した狼の頭が、退却を指示し
たのだろう。

統常は、そう判断した。

統常が、一息いれて、弓を下ろすと、統常に槍を向けてくるもの
がいた。

「おぬしは、何ものじゃ」
そう誰何する、男の声が聞こえてきた。

やはり、こうなるか。
統常は、嘆息しながら、声が出た方へ向き直った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7317y/>

黒羊の戦鬼

2011年12月1日01時52分発行